



2019年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。昨年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員に贈られました。今年度は、学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2019年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

2019年度日本語教育学会 学会賞

受賞者 トムソン木下 千尋 氏

【授賞理由】

トムソン木下千尋氏は、国・地域、教育機関、そして世代を越えての「つながり」を築くことを通して、次世代の育成、日本語教育の社会的認知向上に多大なる貢献をしてきました。

同氏は、1993年より豪州のシドニーにてニューサウスウェルズ大学の日本研究課程で教鞭をとられ、言語学・教育学の観点から、日本語を数多くのオーストラリアの大学生に教えてこられました。その後、豪州日本研究学会会長、グローバル・ネットワーク議長を務め、2回もの日本語教育国際研究大会を大会運営委員長として成功に導きました。また、日豪両政府をはじめ、国際交流基金や多くの教育機関、コミュニティ等とのつながりを活かし、中・高等教育における外国語教育や継承語教育の充実にも大きく貢献しています。

次世代の実践者の育成として、2014年の国際研究大会で初の院生ワークショップを開催し、院生が自分たちで企画と運営を行いました。それ以降も継続して世代、国や地域を越えたつながりをつくり、育んでいます。

また、学習者中心（主体）の日本語教育、自律学習、評価、教師教育などテーマに、海外在住の日本人の日本語教育への参加、日本の大学からの教育実習生受け入れなど、日本と海外の教育実践をつなげる実践と研究を行い、世界各地での数多くの講演活動を含め、積極的に発信されています。

これらの功績は、外務大臣表彰、豪州連邦政府の教育優秀賞、二度の所属大学の学長賞の受賞などでも、その大きな価値が評価されています。

主な業績は、次のとおり公開されています。

- ・共著「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者：その問題点と教師の役割」
（『世界の日本語教育』9号、国際交流基金、1999年）
- ・単著「海外の日本語教育の現場における評価—自己評価の活用と学習者主導型評価の提案—」
（『日本語教育』136号、2008年）
- ・編著『人とつながり、世界とつながる日本語教育』（くろしお出版、2016年）

以上、日本語教育学会の掲げる「人をつなぎ、社会をつくる」という使命を自ら体現してこられ、日本語教育の研究および実践、言語政策にもたらした多くの功績をたたえとともに、今後のさらなるご活躍に期待し、トムソン木下氏に日本語教育学会賞を贈ります。

以上

2019年度日本語教育学会 奨励賞

受賞者 石澤 徹氏

【授賞理由】

石澤徹氏は、2012年に広島大学大学院教育学研究科博士課程を修了されました。日本語教育学，第二言語習得研究，音声学・音韻論を専門に幅広く活動する若手研究者です。2012年より山口福祉文化大学にて専任講師を務められ、2014年より東京外国語大学において日本語教育を担当されています。

近年の関心領域は、第二言語としての日本語音声の知覚，日本語科目と専門科目のアーティキュレーションの方法論，語彙習得における学習者特性の影響で，以下の2つの科学研究費の研究代表者となっています。

・「母語の違いは日本語特殊モーラの知覚にどのような影響を与えるか—誤りに着目して—」（2013-2015年度，科学研究費若手研究（B））：

日本語学習者の特殊モーラ，特に促音の知覚の誤りの傾向を分析し，第二言語としての日本語のリズム習得の普遍性を検証。

・「語彙学習における学習者特性の影響」（2016-2019年度，科学研究費若手研究（B））：

日本語の語彙学習において学習者の特性がどのように関連しているか検証。

2018年に共著『語彙ドン!』（くろしお出版）を出版，これはコーパス言語学の研究成果に基づく，大学や専門学校で講義を受ける，新聞やニュースを理解するための語彙力を身につける語彙学習教材で，どんな専門・分野でも役立つことばを日本語学術共通語彙の中から，1,200語を収録したという，使いやすい教材であるだけでなく，理論と実践を繋ぐという点でもその意義は深いと思われます。

また，2017年には，「第1巻 ことばのまなび手を知る」，「第2巻 ことばのしくみを知る」，「第3巻 ことばの教え方を知る」，「第4巻 ことばのみかたを知る」の4巻からなる『日本語教育の道しるべ』シリーズ（凡人社）を監修し，出版していますが，これは，新たに日本語教育を志す者にとって参考になるシリーズであり，後進の育成という点でも意義は大きいと思われます。

さらに，2017年より有志を募り「ことばとまなびでつながるなかまの会」として，「日本語教育の夏フェス」というイベントを開催しています。これは，現場の非常勤の実践者も，研究・実践の最前線を知るブラッシュアップのための企画であり，大勢の参加者を集めています。

また，さまざまな活動を通し，多様な機関た日本語教育関係者のネットワークづくりにおいても，非常に精力的に活動を続けています。

以上の点を評価し，今後のさらなる活躍を期待し，石澤氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2019年度日本語教育学会 功労賞

受賞者 佐久間 勝彦 氏

【授賞理由】

佐久間勝彦氏は、東京外国語大学、聖心女子大学で留学生の日本語教育、日本語教師・日本語教育研究者の養成などに関わられるとともに、1980年代より国際協力機構（JICA）や国際交流基金などにおいて海外への日本人教師、専門家の派遣事業に対し、選考や派遣前研修、派遣中の支援に長年尽力されました。

また、佐久間氏は、1983年に日本語教育映像教材『ヤンさんと日本の人々』の企画に国際交流基金日本語課の担当職員として関わられました。本教材は日本語映像教材の草分け的な存在で、特に海外における日本語教育に大きく貢献しました。海外でのテレビ放送において、1980年代後半から1990年代半ばにかけて「テレビ日本語講座（A Television Course “Let’s Learn Japanese”）」として、アメリカ、カナダ、オーストラリアでは英語版で、スリランカ、中国、ブラジル、香港、タイでは各国語版で放映されました。その制作方針や利用状況については、「音声+映像教材の条件と可能性—ビデオスキャット『ヤンさんと日本の人々』に関連して—」（『日本語教育』64号、1988年）に発表されています。

さらには、海外中等教育向け日本語教育素材集『教科書を作ろう』（国際交流基金、1999年）、『続 教科書を作ろう』（国際交流基金、2001年）の監修を務められました。海外で実際に中高生に日本語を教えている非母語話者日本語教師の意見を聴取して作成されたこの素材集は、非日本語母語話者日本語教師をサポートする国際交流基金の方向性を決定づける重要な役割を果たすものであったと言えます。とりわけ、日本語教育素材集は著作権者である国際交流基金への事前の利用許諾を必要とせず、完成後に報告するだけで良いとした点が画期的でした。これが功を奏し、韓国、マレーシア、インドネシア、タイ、中国などで教材が作成され、海外の日本語教育への寄与は大きかったと言えます。

2015年には「海外日本語教育学会」を設立され、海外の日本語教育の実践や研究を後押しする活動を行ってこられました。「海外日本語教育研究の課題」（『海外日本語教育研究』創刊号、海外日本語教育学会、2015年）では、海外における日本語教育に関する記録や研究が少ないこととその信頼性が必ずしも十分でないことを指摘し、世界各国における日本語教育研究の具体例および今後期待される研究の具体例を提示されています。

以上のように、佐久間氏は海外における日本語教育に関して、学術的貢献はもちろん、JICAや国際交流基金などの機関との協働で実務的な面でも多大な貢献をされ、重要な役割を担ってこられました。佐久間氏のこれまでの功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2019年度『日本語教育』論文賞 受賞論文

継承日本語学習児における二言語の作文力の発達過程

—ドイツの補習校に通う独日国際児の事例から—〔研究論文〕

掲載号：『日本語教育』172号（2019年4月発行），pp. 102-117

執筆者：ピアルケ（當山）千咲氏（東京経済大学）・柴山真琴氏（大妻女子大学）
高橋登氏（大阪教育大学）・池上摩希子氏（早稲田大学）

【授賞理由】

本論文は、今後さらに重要性の高まる継承語研究ならびに JFL・JSL の教育現場において、強いインパクトを与える論考である。6年にわたって同一課題による作文力の推移を観察したデータは高い資料的価値を有するものである。文字・表記・単語レベル、構文レベル、談話レベルと作文力を総合的に分析する手法や、物語文と説明文という異なるジャンルを比較し、それぞれの作文力の発達に必要な認知能力や教科学習と合わせて分析を行う視点などは啓発的であり、各研究者の専門性を活かした共同研究ならではの優れた研究となっている。一児童を対象としたケーススタディではあるが、ドイツの継承児と、日本の母語児からも同一課題に基づく作文データを集めて対照群としている点も研究計画の緻密さと頑健さを感じさせ、高い評価に値する。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

日本語母語児の作文力を基準にするのではなく、当該児童の優勢言語による作文力を基準にした言語支援がより適切で効果的である点を訴えるものとして、日本国内の学校教育現場や、海外の補習授業校における指導に大きく貢献する。また、二言語の作文力において特定の側面が伸びる時期に合わせた手当てを提案している点も、具体的な示唆に富む知見である。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

日本語力と優勢言語の作文力が関連しながら形成される過程に注目し、共有基底言語能力説をベースとしながら、近似性の低いドイツ語－日本語の事例について独自に検証を行い、2言語間に育つ子どもたちの言語学習に新たな可能性を開こうとする点が新規性として評価できる。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

本研究における考察と指導への実践的な示唆は、継承語教育や年少者教育、バイリンガル教育の分野だけでなく、語彙教育、文法教育、漢字教育、作文教育といった技能別の研究の進展にも大いに寄与する可能性がある。本研究のもたらす知見は、日本語教育だけでなく、教育に関わる者すべてが知っておくべきものといえよう。

以上

受賞論文 要旨

継承日本語学習児における二言語の作文力の発達過程 —ドイツの補習校に通う独日国際児の事例から—

ビアルケ（當山）千咲・柴山真琴・高橋登・池上摩希子

本研究は、ドイツの補習校に通い、ドイツ語を優勢言語、日本語を継承語とする独日国際児の事例において、二つの異なるジャンルの二言語の作文力が、小4 から中3 まででどのように形成されるのかを分析した。対象児は、日本居住の日本語母語児に比べ産出量や語彙、構文の多様性等の伸びが遅れながらも、談話レベルでは母語児に近い評価の作文を書いていた。その背景を二言語作文の縦断的分析により探ったところ、優勢なドイツ語に牽引されるように日本語も伸び、まず接続表現や構文の複雑化によって論理的つながりが改善され、次に全体構成や内容の高度化が生じることがわかった。またドイツ語作文のレベルに近い日本語作文を、限られた日本語の表現手段を工夫して書いているが、複雑な内容の説明における文法的誤用や漢字熟語の不足等に表現上の困難が見られた。以上の発達過程の特徴から、補習校での指導への示唆を抽出した。

(ビアルケ（當山）—東京経済大学・柴山—大妻女子大学・高橋—大阪教育大学・池上—早稲田大学)

The Process of Japanese-Heritage Language Learners' Bilingual Writing Proficiency Development: A Case Study of a German-Japanese Child Learning Japanese as a Heritage Language at a Japanese Supplementary School in Germany

TOYAMA-BIALKE Chisaki, SHIBAYAMA Makoto, TAKAHASHI Noboru and IKEGAMI Makiko

The purpose of this study was to elucidate how Japanese-heritage language learners develop proficiency in bilingual writing longitudinally. We analyzed samples of Japanese writing produced by a German-Japanese boy learning Japanese as a heritage language, as he progressed from the fourth to the ninth grade; his dominant language was German. Although the development of his proficiency in writing Japanese in terms of the number of characters and his lexical and syntactic variety was somewhat delayed compared to Japanese monolingual children in Japan, no significant difference was observed in his discourse level. Close examination of his compositions in the two languages revealed the developmental process to comprise the following two stages: logical connections within the texts improved through enhanced use of conjunctive expressions and grammatical complexity, and textual structure and rhetoric became increasingly sophisticated. These changes were observed to occur first in the German writing samples and may have contributed to subsequent improvements in the boy's Japanese writing. The boy wrote compositions in Japanese by skillfully using his limited range of Japanese expressions to achieve a discourse level that was almost equivalent to that of his German compositions. However, he experienced difficulties with grammatically correct sentence construction and the use of kanji idioms to discuss complex topics. Based on these findings, we offer some recommendations for teaching aimed at enhancing the writing proficiency of Japanese-heritage language learners.

(Toyama-Bialke: Tokyo Keizai University, Shibayama: Otsuna Women's University,
Takahashi: Osaka Kyoiku University, Ikegami: Waseda University)

2019年度日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧 (50音順)

【授賞対象】

2005年以降、学会の役員・代議員・旧評議員・委員として、一定の年数を歴任し、尽力のあった以下の皆さまに、学会活動貢献賞を贈ります。

宇佐美 洋 氏

小河原 義朗 氏

金田 智子 氏

久保田 美子 氏

小山 悟 氏

佐藤 勢紀子 氏

島田 めぐみ 氏

中野 佳代子 氏

西郡 仁朗 氏

浜田 麻里 氏

深澤 のぞみ 氏

古川 嘉子 氏

前田 直子 氏

村岡 貴子 氏

以上